

The Crossing Point

Copyright 1998 Steven M. Greer M.D.

光速の彼方へ - 新たなる現実への通過点 -

スティーブン・M・グリア 医師

著作権 1998 年

([CSETI のウェブサイトより](#))

洞察と結びついた経験および観察は、しばしば真理と現実の性質を解明する、新たな飛躍をもたらす。

科学（そして一般には真理の追求）とは、実証的観察を、ときにはインスピレーションを含め、知識、思考、洞察と協調的に融合させたものである。しかし、いかなる問題もそれを生み出した意識のレベルからは解決され得ないことが真実であるように、現実についての洞察および重大な科学的発展もまた、現状の環境のみから生じることはめったにない。むしろそれは、現状を超えた何かから生まれる。それが初めて人々の前に提示されるとき、多くは抵抗に遭い、非難中傷されることさえある - 斯くして、現在の科学界の指導層は、ガリレオを糾弾したバチカンの支配層からほとんど変わっていない。

地球外生命の問題を扱う場合、このことは疑いもなく真実である。なぜならば、我々が追求しようとしている現実とは、本質的に人類にあらざるもの、地球上に存在せぬものであり、またそれゆえに、現在の科学的理解という、こぎれいに整理された箱の外側にあるからである。当然ながら、恒星間旅行の能力を持ついかなる進歩した地球外生命体も、我々には魔法のように見える技術を所有していることだろう。だから、もし我々が 20 世紀後半の人類中心の見方のみによってこの問題を追求するならば、その真実の 99.9 パーセントを見逃すことは確実である。なぜならば、新しい真実は常に現在のファインダーのまさしく外側にあり、さらにこのファインダーのレンズは、嘆かわしいほどの欠点を持っているからである。

ハーバードにある誇張され過ぎの 10 億チャンネル BETA（Billion-Channel Extraterrestrial Assay；地球外文明からの電波信号探知システム）を用い、知的生命体を探すために天空を走査するとき、我々は立ち止まってこう考えなかっただろうか？：この装置は、我々を探すための煙輪発見器のようなものかもしれない。すなわち、もし我々の先祖が、森から立ち上る煙輪のしるしを探して我々の文明を検出しようとしたとすれば、彼らはかなり落胆したことだろう。我々は煙輪信号を捨て、テレビやラジオの信号へと移

行してしまったからである - しかし彼らは、電磁信号と呼ばれるこれらの異質物を検出する装置を持たなかっただろう。

我々は、地球外生命体 - 遠い恒星の周りを回っている別の惑星で進化した人々 - が、20 世紀の人類の技術を実際に利用していると、本当に考えているのだろうか？ 煙輪の時代と何か別のものの時代との間 - 電波の時代はほんの一瞬間ではないだろうか？ つかの間の流行、儚いカゲロウ...

地球外知性体研究センター（CSETI）は、実に数千人の人々と共に数千時間を星空の下で過ごし、異常としか言いようのない現象を目撃してきた。我々は、宇宙機が出現したり視界から消えたりするときの興味深い写真やビデオをいくつか持っているが、本当に興味を引く現象は、ビデオにも写真にも撮ることはできなかつただろう - 実にその最良のものは、おそらく計測することもまったくできなかつただろう。

これは、言ってみれば現象の良質部分が、従来の現実（conventional reality）とでも呼ぶべき世界の境界付近で起きているからである。多くのことが光速という通過点（crossing point of light）の両側で起きている - しかし最も興味深いことは、超光速の側で起きているのである。

地球外起源の UFO（未確認飛行物体）は、我々の現在の技術などまったく利用していない - だからもし我々が、現在の科学的知識という、こぎれいな箱の内側からのみそれらを検出し理解しようとするならば、ひどく落胆することになる。実に、我々はそのデータの 99.9 パーセントを見逃し、真実は我々自身の視覚にある濃霧によって隠されるだろう。

この論説で述べられることを支持する人は、ほとんどいないだろう。その内容は馬鹿げたことだと反対され、答よりもさらに多くの疑問を提起するだろう。それは現状の体制を大いに困惑させ、偏狭な人々を怒らせるだろう。その内容はまた、我々がいわば気がふれ、ET（地球外知性体）問題がこれほどにもナンセンスであること、等々の証拠とされるだろう。これまでもずっとそうだったのだから...

私自身、以下に述べる内容を書くことには随分ためらいがあった。その理由は今さら言うまでもないだろうが、それにもかかわらず、この情報が謎を解明する核心であることもまた同じくらいに確かなことである。そしておそらく、地球外知性体に関わる現象から我々が学ぶべき、本当の教訓でもあるだろう。それは、我々が知識、科学、真実、および個人的な経験において、次の段階に進むことに他ならない。

これから述べる観察事実と仮説は、UFO 目撃報告という従来の経験的データを、多くの接近遭遇に伴うさらに異様な '摩訶不思議' 体験に結びつけることになるだろう。一旦、物質と心、機械装置と意識、物理科学と認識および思考に関する新しい科学を繋ぐ統合理論が理解されたならば、そのとき初めて、雑多で一見矛盾する ET 諸現象が何らかの意味

を持つことになる。我々は今、我々の未来という領域に足を踏み入れようとしているのである - ほとんど正しく認識されてはいないが、それは今ここにある隠された現実である。この論説を読んだ読者は、こう言って困惑するかもしれない：この情報は科学か、精神世界の話か、その両方か、そのどちらでもないか、それとも... あなたがそれを必要としそれで安心するなら、どのように分類してもかまわない。どのみち、真実は常に分類を超えたところにあるのだから。

この惑星を発見し、地球の近くまたは地球上で数十年間我々を観察している地球外生命体がいることに、疑問の余地はない。ある人々は、彼らは我々の近くに数百年間、いや数千年間いると考えている。それが数百万年間だと言う人さえいる。確かなことは、彼らは今ここにいるということである。その証拠は圧倒的であり、ここで詳しく述べることはしない。

しかし、これらの疑問について考えてほしい：彼らはどうやって地球に来たのか？生物学的生命体の自然寿命の中で、彼らはいかにして恒星間の遠大な距離を移動し、どこかの場所に到達するのか？また、そのような距離のリアルタイム交信を、どのような方法で行なうのか？

考えてほしい：もしある地球外生命体が、1000 光年（秒速 186,000 マイルで伝播する光が 1000 年かけて進む距離）彼方の恒星系から来るものだとすると、彼らが地球に到達するためには、光の速さで 1000 年を要するだろう！再び故郷に戻るのに、さらに 1000 年を要する。すなわち、往復旅行をするのに、光の速さで少なくとも 2000 年を要するのである。これはキリスト生誕のとき以来経過した時間である。一つの生命体がこれほどの長い時間を生き、地球にたどり着くことはとてもありそうになく、ましてや故郷に戻るなど考えられない。そしてこの 1000 光年という距離は、**我々がいる銀河系近傍の比較的近い場所なのである**。さて、交信について考えてみよう。今地球上で流行しているラジオ、マイクロ波、テレビ、その他のどのような電磁信号を用いても、この ET が地球に到着しそれを故郷に知らせるためには、(ラジオのような電磁信号の伝播速度である光の速さで) 1000 年かかるだろう。ET の故郷惑星からその返事が届くのに、なお 1000 年かかる。さらに 2000 年である！

明らかなことは、いかなる恒星間旅行文明も、必然的に、今日用いられている 20 世紀地球の装置が検出できる領域の外側で作動する技術を発達させているだろうということである。それどころか、そのはるか外側である。その隔たりが余りにも大きいので、ET 宇宙機がその姿をまったく‘見られる’ことなしに、全機体を SETI (Search for Extraterrestrial Intelligence ; 地球外知性体探査) 電波探査プロジェクトの真上に滞空させることも可能だろう (おそらく、そうしていた)。なぜか？我々は間違った装置で見ていたのである。我々は、人類にあらざる文明を、まさしくこの 20 世紀の技術で検出しようとしている。しかし、別の方法があるのではないか？

‘光速’移動および交信に要する時間のかかり過ぎについて先に考察したことからお分りのように、当然ながら、恒星間宇宙から地球に到達する能力を持ついかなる ET 文明も、我々が知る線形時間／空間を迂回する技術を利用しているだろう。すなわち、彼らは線形時空の現実から抜け出し、彼らを検出するためにハーバードや SETI で現在使われている電磁スペクトルのはるか外側にある技術 - および現実スペクトル (spectra of reality) - を利用して、交信および移動を行なっているに違いない。

X 線、ガンマ線、紫外線、赤外線、電波といったものは、我々がそれらを正確に測定する装置を手にするより前に存在していた。それと同じように、進歩した ET たちにより利用されている現実スペクトルもまた、確かに存在する。すなわち、ET たちは、現在のいわゆる正統 (non-covert) な科学装置では正しく測定できない、物理的宇宙 (physical universe) の諸側面を利用しているのである。

覚えてほしい、我々はついにそれを検出する科学装置を開発したためにガンマ線を発明したのではない。ガンマ線は、我々がそれを ‘発見’ するより前に永劫に存在していた。ガンマ線は存在していたが、人間の目に見える可視スペクトルの外側にあったために、感知されなかったのである。

同様に、ET たちは地球にいるが、通常彼らは現在の一般的な測定装置が検出できるエネルギースペクトル (spectra of energy) の外側に存在している。時々彼らは、我々の測定可能な現実にはひょいと入り込むか通過するかして、結局我々に目撃されたり、写真に撮られたり、それが着陸したり、さらに墜落したり（または撃墜されたり）する。こうして彼らは、レーダー画面に痕跡を残し、またマイクロ波、超音波といったあるエネルギースペクトルにおいて顕著な場の流束を発生させることになる。しかし、それから彼らはいなくなった。どこに消えたのか？ 何に戻ったのか？ いつの時に帰ったのか？

実に、これは真の難題である。私は 35 年間様々な機会にこれらの物体を目撃してきたが、今確信していることは、これらの物体とその中にいる生命体は、振動数シフト (frequency shift) および高々エネルギー物理学を利用して、線形時空と現在の検出能力の外側にある別の物理的エネルギーおよび物理的現実 (physical reality) スペクトルとの間を往来しているということである。それを次元間移動 (inter-dimensional)、または多次元移動 (multi-dimensional) と呼ぶ人々もいるが、明確に定義されて初めて役に立つ言葉である。しかし、一旦それを理解し経験すると、それはガンマ線が石器時代の人々にとり超自然であったのと同様の別の次元であることに気付く： 実際には、これらの ‘次元’ のすべては、結局それほど ‘別’ であるわけではなく、この現実の一部、一区画であり、その中に折り畳まれている。

残念ながら一部の研究者は、UFO が地球外のものではなく、次元移動の物体であると結論づけている。我々自身の直接調査からきわめて明らかなことは、それは両方だということである。

すなわち、ET の現実の性質は、我々自身のそれととてもよく似ている - 彼らは旅行、
交信、および関連する仕事のために、少し幅の広い現実スペクトルを利用しているだけな
のである。

この少し幅の広いスペクトルは、越境して次元間移動などと呼ばれる現象に入り込んで
いるが、実際にはすべてこの現実内に存在している。ただ異なるのは、それがより微細か
つ繊細であるために、我々の一般的な科学装置では今のところ測定できないということだ
る（闇の諸計画は、これを測定する能力を確実に持っている）。

この議論をもっと明確にし目に見える現実とするために、CSETI（地球外知性体研究セ
ンター）の証人であるこの軍人の報告を考えてみてほしい。

ある晩に、一人の紳士から私に電話がかかってきた。彼は空軍にいたことがあり、また
ロッキード・スカンクワークスのケリー・ジョンソンとも一緒に働いたことがあった。彼
が電話をしてきた表向きの用件は、CSETI の UFO 事象に対する軍の証人の一人になりた
い、という申し出だった - しかし、もっと大きな目的は、彼が 1960 年代初めから半ばに
かけて経験したあることについて、私の意見を聞くことだった。当時彼は、いわゆる体外
離脱またはアストラル体投影を経験するための実践法を学んでいた。体外離脱とは、身体
の繊細な部分またはアストラル体が、肉体を離れてどこかへ飛んでいく時のことである。
ある日、彼の指導者が彼に、もう間もなくこのような経験をする段階になったと告げた。
そしてその晩に、彼は実際に最初の OBE（out of body experience；体外離脱）を経験
したのである。しかし、彼はそのとき起きたことに本当に驚いてしまった。彼は何度も、
自分としては完全に正気で理性的な人間のつもりである旨をことわり、また、これから余
りにも奇想天外な話になることを前もって詫びた上で、次のように語った：彼は肉体を離
脱すると間もなく、自宅の天井を突き抜けて急上昇し、その上に広がる空間へ飛び出した -
そして、地球大気中のどこかに滞空していた 1 機の地球外宇宙機の側面に突っ込んだので
ある。それをしたとき、彼は本当にその宇宙機を揺らし（思い出してほしいが、このとき
彼はアストラル体だった）、それからその内部にひょいと入り込んだ。入るとすぐに、彼は
何人かの ET が操作卓についているのを見た。彼らは彼の方に目を向け、彼を見、そして
こう言っているかのような表情をしたのである：‘おやまあ、どうして君は自分の進行方
向に注意しなかったの！’

この紳士が私に、自ら経験したことについて絶対の真実を語っていることに、私は何の
疑いも持っていない。彼が体外離脱（OBE）をしたこと、制御できないまま自宅の上に広
がる空間へ飛び出したこと、実際の ET 宇宙機に突っ込んだことを、私はまったく疑って
いない - その宇宙機は、我々が体外離脱（OBE）や明晰夢を経験するときのそれにきわめ
て近いエネルギー形態で滞空していた。

彼は、自分のアストラル体で宇宙機を揺らした。そして、その内部にいた ET たちは彼

を見た（彼もまた彼らを見た）。ここで考えてほしい：この軍人はどのようなエネルギー形態にあったのか、また ET たちは？もし、その ET たちが天使やゴーストの類であったならば、どうして彼らは進歩した技術の所産である宇宙機の中にいて、コンピューター操作卓を操作していたのか？天使はコンピューターを必要としない...

さて、この紳士だが - 彼は、自分が一種の変わり者に思われるだろうと考えて、この話をとてもおずおずと私に語った - 私が、これはとてもありふれた経験であること、さらに ET 技術が光速という通過点を超えて機能する性質を持つことを説明すると、驚いた。すなわち、ET 宇宙機や人々がそれに移行したり、それから抜け出したりすることのできる物理的エネルギーのスペクトルまたは側面は、神秘主義者や昔からの言い伝えがアストラル界（astral field or plane）と呼ぶであろうものによく似ているのである。現実を構成するこの要素を我々が正しく検出し測定することができないからといって、それが実証的観察と経験を退ける理由にはならない。つまるところ、実証的観察と経験はすべての科学の母なのである。木から落ちるリンゴを観察していたニュートンを思い起こしてほしい。

しかし、いわゆるアストラルまたはエーテル的側面と ET 技術との間のつながりは何か？そもそも、なぜそれらは関係があるのか？

これを理解するために、我々はこう問う必要がある：“光速という通過点を超えたところに何があるのか？”すなわち、光速という壁の向こう側には何があるのか - 光、電子、さらに素粒子の速度または振動を超えたとき、あなたは何を経験するのか？その壁を横切って光速を超え、物質の振動数およびエネルギーを超えたところに、何が存在するのか？

当然ながら、地球を訪れているいかなる ET 文明も、恒星間旅行および恒星間交信の能力を持っている。これが意味するものは、それらの技術が、我々がラジオを使ったりジェット機で飛んだりするのと同じくらい容易に、光／物質の壁の向こう側で作動するということである。これが彼らの現実であり、世界なのである。これが彼らの携帯電話であり、自動車なのである。これが彼らが存在する世界の技術であり、理論であり、日常なのである。しかし、それが我々にとり魔法のように見えることは確かだ。

これを考えてほしい：光速のとばりを横切るとき、あなたは何を発見するのか？光速という通過点を超えたところに何があるのか？そこで物理学はどのように働くのか？そこでの空間および時間はどのようなものか？そこで我々は思考を測定することができ、それを思考子（thoughtron）と呼ぶのか？心と機械装置は一体化するようになり、融合して作動するのか？そこでの生存はどのようなものであり、何を経験するのか？その現実を、我々はいかにして知り得るのか？

大まかとはいえ、これらの問題に取りかかるために、我々は観察事実および経験を光／物質の通過点の両側から矛盾なく説明できる、一つの宇宙観を明らかにしなければならない。ここで私は、内面的なもの、外面的なものを含めて、現実についての私自身の理解を

述べておかねばならない。そして、読者には前もって忍耐をお願いしたい。この議論は、多くの人々に不愉快な思いをさせる領域へと我々を連れていくことになる。特に、科学的素養のある人々や、きわめて伝統的な宗教的背景を持つ人々である。ここで私が話すことは、私自身の経験と背景からきたものであることを認めざるを得ない。だから読者には、以下に述べる考えおよび用語を考察するに際して、寛容であることを願う。

初めに、私の先入観を述べさせてほしい： 神（God）は存在し、考え得るあらゆる形で遍在する。これは、私の生い立ちと教育に完全に対抗するものである。というのも、私は、試験管内で測定できないものは何も存在しないと信じていた両親の手で、きわめて敬虔な無神論者として育てられたからである。それにもかかわらず、私の経験がそうではないことを私に教えてくれた。とにかく神は存在する。我々がそれを認識するか否かに関わらず...

それゆえに、私がこれから提示する宇宙観は、心の普遍的要素をその方程式の中に織り込んでいる。一部の人々は、それを神の非人格的側面（impersonal aspect of God）と呼ぶかもしれない。偉大な宇宙の心（Great Mind）、普遍的な宇宙の心（Universal Mind）、原初から存在する宇宙の心（Preexistent Mind）、絶対不変のもの（Absolute）。

私が理解するようになったこの調和宇宙では、あらゆる存在 - あらゆる原子、あらゆる星、あらゆる分子、あらゆる人々 - の根幹は、時空のあらゆる点に存在しながら、空間、時間、物質のどの点にも束縛されない、ある非局在的な本質（non-local essence）である。この本質は覚醒し、知性を持ち、認識している。それは意識である。それは心である。それは覚醒した認識（awakeness of awareness）であり、宇宙の分化されていない純粹な知性であり心である。それは草のあらゆる葉身に宿り、空間の隅々を満たし、宇宙の最遠部に及んでいる - なおかつ、それは分割することも、空間、時間、物質の一点にとどめることもできない。すなわち、それは一体状態にある、不変かつ不可分のものであり、その働きにより絶対不可分の統一（oneness）が創造されているのである。また、その働きがひとたび認識されるや、あらゆるものが非局在性を帯び、時空のあらゆる点は他のあらゆる点への窓となり入り口となる。この知性を持つ本質のあらゆるものを貫き統合する側面により、すべての存在物は、存在のこの非局在性、統合性を介して常に結びついており、実際にアクセスすることが可能なのである。

存在の仕組みは、この意識と知性を持つ存在の非局在的要素が、空間、時間、物質、等々の相対性または変化により影響されないということである。なおかつ、矛盾するようだが、この非局在的要素はあらゆる砂の一粒にも、あらゆる銀河系にも、ただ一つの形でまさしく存在している - それは常に一つであり、不可分の全体である。

非局在性（non-locality）は、考える存在のレベルが微視的であれ巨視的であれ、その有機的かつ統合的側面により、まさしくその局所的レベルで存在している。すなわち、調和宇宙は、あらゆるレベルの絶対的統合が存在するような形で統合されているのである - だから、神秘主義者たちが、一滴の水の中に全宇宙を見るとき、彼らは正しかっ

たのだ。

原初から存在する、この絶対不変の知性と意識の場から、他のすべてが現れる。繰り返すと、矛盾するようだが、分割することのできない知性と意識の統一場は、そのレベルがどれほど大きくても小さくても、あらゆるレベルで存在している。絶対不変のものは絶対不変のままである - なおかつ、それはあらゆるクォーク (quark; 素粒子) に存在する - しかし、そのクォークにより束縛も、制限も、分割もされない。

この驚嘆すべき無 (Nothingness) (これは絶対認識で充満している) から、表現された調和宇宙をそのすべての星々、銀河系、原子、人々と共に生じさせるために、単純であると同時に複雑優雅な、ある創造的プロセスが存在する。すなわち、絶対不変の領域から創造がわき起こり、それは神の創造的側面 (Creator aspect of God) と呼ばれているものにより維持されるのである。この創造的プロセスに不可欠な要素として、まず意思 (will), すなわち想念の音声成分 (sound component of thought) がある。次に想念の映像成分 (visual component of thought) があり、アストラル界の構造的側面 (structural aspect of the astral world) があり、物質世界を生み出す母体 (matrix of the material world) がある。これらの諸要素が宇宙全体を展開し、そのすべてを包み込んでいる。

絶対不変のものの創造的側面 (Creator aspect of the Absolute) は、その意思 (His Will) の働きにより、次のようにして、きわめて繊細な部分からきわめて物質的な部分まで、調和宇宙を創造する：

- 純粋な理念／想念 (idea-forms/thought) の音声成分が、ありとあらゆる創造物 - 蟻であれ銀河系であれ - のための理念／想念の音声質である、普遍概念 (universal) の側面 (必要ならばそれを次元と考えてもよい) を生じさせる。創造におけるこの最初の理念 (idea form) を青写真として、進化と変化がその周りに起こる。調和宇宙そのものが、この想念の音声成分による音声質として存在する。非局在的な、遍在する心／知性 (mind/intelligence) という本質が、この段階とそれに続くあらゆる段階を貫いて存在する。一部の伝統においては、宇宙全体とそのすべての内在物を含む、この理念／音声の成分または形態を、‘原因の世界または因の世界’ (causal or causative world) と呼んでいる。聖書その他の教えに言う神の言葉 (Word of God) とは、このことだと私は考えている。‘初めに言葉ありき...’

続いて、想念の音声／理念の成分は、抽象性をより減じた、しかしまだきわめて微細かつ繊細なある側面を生じさせる。一部の人々はそれを ‘アストラル’ (astral) と呼んでいるが、私はそれを意識的-知性的映像成分 (conscious-intelligent visual ; CIV) と見なしたい。原因の世界の青写真または理念／想念／音声を内包するこの側面は、より明確であり、想念につながっている形が表現されたものとして、‘見る’ (visible) ことができる。この世界は広大で美しいものであり、多くの明晰夢がこの世界または側面との相互作用に関係している。あの体外離脱をした軍人は、基本的にこのエネルギー形態または側面に位

相シフト (phase shift) していた ET 宇宙機と、アストラル体または CIV 体相互作用をしたのである (これについては後でさらに述べる)。

● 絶対不変の、分化されていない宇宙の心は、原因の世界の理念／音声／想念、およびその CIV またはアストラルと共に、いわゆる物質宇宙を支える、または生じさせる母体を創造する。理念／想念／音声という言うなれば青写真および繊細な CIV が、より粗い、または表現された物質宇宙の創造を実際に支え助ける。しかし物質宇宙は、原因および CIV の側面もそうであるように、一体状態にあり分割することのできない、絶対不変の心 (Absolute mind) を内包している。実に、科学が現在の装置類を用いて測定し研究することのできる、表現された物質宇宙のありとあらゆる側面が、これらのより微細な側面、またはエネルギースペクトルのすべてに結びついているのである。物質宇宙を織りなす縦糸と横糸は、その基礎を意識と想念に置いており、またアストラルまたは CIV という創造母体を内包している (またはそれと結びついている)。それゆえに、これらの諸側面を、まったくかけ離れた '別の次元' と見なすのは正しくない。

このかなり大まかで簡単な概説が、いくつかの細部を除外していることは認めざるを得ない。それらはまた別に論じるのが適切である。しかし注目すべきことは、上に述べたそれぞれのレベルにおいて、多くの中間段階および細部の表現があるということである。すなわち、原因および CIV (意識的・知性的映像成分) の側面は、幾多の分化、表現、働きの諸法則を内包しているのである。それは、物質宇宙が微細な素粒子、渦巻く巨大銀河、および銀河集団を持つのとよく似ている。実に、これらの広大な領域に作用を及ぼしている細部および諸法則の様相は、物質宇宙のそれが小さく見えてしまうほどであり、この論説で明らかにすることは余りにも愚かと言うべきである。

人間というもの (これには人類以外の高い知性を持つ生命体、すなわち ET たちも含まれるだろう) は、あらゆる側面 (または次元) をその内に折り畳んで持っている。人間の意識または精神は、個々人がそれに気付かなくても、絶対不変の意識的存在 (Absolute conscious being) と常に接続している。というよりも、すでに述べたように、意識または純粋な心はその本質的側面において、実に我々を覚醒せしめている - そして我々を我々たらしめている - そのものなのである。意識または純粋な心は一体状態にあり、分割することができない。それは常に絶対不変のものと本質的に一体であるが、我々は多様性と分離のみを見るように教えられている。こうして、個別化 (individuation) が一体状態 (unitive state) を圧倒する - その結果、我々は自分たちが分離した別々の存在だと考える。これは、すべての宗教的実践が、その儀式、祈り、瞑想の中で正そうと試みている、一つの知覚欠損である。

アリ (Ali) による古代スーフィー (*イスラム) の教えは、こう述べている: “汝の中に宇宙が折り畳まれているというのに、汝は汝自身を小さな者と考えるのか?” この修辭的疑問は、心のホログラフィー的性質と、宇宙における人間の潜在的立場を思い起こさせる: 我々は、心または意識の非局在的、遍在的側面を経験することにより、宇宙のあらゆる

る側面に直接アクセスし、経験することができる。なぜならば、意識の非局在的側面こそが認識そのものの核心だからである。宇宙のあらゆる側面は、常に‘そこ’にあり、経験しさえすればよい。

人々が時折、非局在性の自然な経験をするのは、心のこの側面または性質のためである：彼らがある夢を見ると、翌日または翌年に、夢の中で知覚された出来事が見たとおりの正確さで生起する。なぜ、このようなことが起こり得るのか？

心の性質は、それが一体状態にあり、分割することができず、時間空間のあらゆる点に存在している - しかし空間または時間のどの側面によっても、束縛も制限もされない - というものである。すなわち、この特質により、空間時間の中の二つの点に同時アクセスすることができるということである。人類の歴史は、このような報告で満ちている。それらは、現代の科学により不思議なものとして退けられるのが普通であるが、実際には次の科学的飛躍を理解するための鍵を握っている：意識と非局在的現実の研究。

明晰夢の中では、その人のいわゆるアストラルまたは CIV（意識的-知性的映像成分）の側面が、空間および／または時間の遠い点を呼び起こすか知覚するのに伴い、益々深まる非局在性の経験をする。これは、一旦我々が、心または意識がその基本的性質を帯びて常に存在していることを理解したならば、それほど不思議ではない。心または意識は、時間的限界も空間的限界も超越した一体状態にあり、それにより空間および時間のどの点にもアクセスすることができるのである。初めは一度に一点である。しかしこれを、神（God）の特権および能力と混同すべきではない。神、すなわち絶対不変の普遍的心（Absolute universal mind）は、すべての時と場所で、常に同時にすべての物事を知っている。しかし個人の場合、上に述べた特質、およびその個人の基本的認識に不可欠な一体状態にある心の性質により、予知、インスピレーション、直観、遠隔視、等々を経験することができる。

プリンストン大学のロバート・ヤーン博士は、この意識の非局在性の、機械システムに関係する別の側面を研究した。読者はこれらの実験結果を学ぶべきである。それは、心および思考が、例えば乱数発生器に向けられるとき、その装置が発生する結果に影響を与え得ることを実証している。これは、認識と物質の間にはある結びつき（nexus）またはつながり（link）が存在するがゆえに、達成されるのである：物質を織りなす縦糸と横糸は、意識と共に織り込まれており、実際には別の振動数で表現された心というものにすぎない。だから、個人は祈りや視覚化により、自分の身体や別の人間の健康に影響を与えることができるし、機械システムにさえも、思考および意識を経由して影響を及ぼすことができる。

ラリー・ドッシー博士らは、この心または現実の非局在的性質を実証する、多くの科学的研究を収集した。読者は、その意味を十分理解するために、これらを詳細に学ぶべきである。歴史は、このような不可解な出来事の報告で満ちている：祈りの最中に自然に空中浮揚をした人物、物体を物質化したり非物質化したり、部屋を越えてそれを遠隔移動した

りすることのできるアデプト（達人），等々。それを奇談や迷信的話題として退けることは容易であるが，人類の歴史および最近の科学的実験は，意識が非局在的であること，我々が定義する時間空間の外側で作用し得ること，離れている無生物または機械に明らかに影響を及ぼし得ることを，はっきりと確証している。

一旦，基礎にある宇宙観を正しく理解したならば，上に述べたことを理解するのは容易である：意識は決して分割されず，どこにでも存在し，空間にも時間にも決して制限されず，なおかつ，矛盾するようだが，空間および時間のあらゆる点に存在する - あらゆる原子からあらゆる銀河系に至るまで。このように，意識と物質の間の接続は本質的であり，不自然なことでも難しいことでもない。想念された事象は，この結びつきの中で次に現実化するのである。

以前の論説で，私は最近起きた ET 技術の異常な現れ方について論じた。ET 現象に関わるこれらの多くの側面は，主流の UFO 誌や研究者たちからさえも，抑圧されたり報告から除外されたりする。なぜならば，それらの現象は，従来の科学的基準という常識の外にあるからである。しかし，最も我々の興味を引くべきことは，まさにこれらの ET 技術の異常な現れ方である：それらは，我々の現在の科学的知識など幼稚園児の思案にも思える，宇宙の新しい理解への扉を開けることになる。

本題に戻ろう：ET 宇宙機とその搭乗者たちは，どのようにして広大な恒星間宇宙および時間を往来しているのか？ よろしい。一旦，あなたが光速という壁の向こう側に振動数シフトすると，その広大な空間の剛直性は完全な柔軟性になり，その大部分は迂回可能であることが分かる。一瞬のうちに ET 宇宙機とその搭乗者たち全員が，上に概観した調和宇宙のより微細な側面に位相シフトし，次には現代科学に知られている物質宇宙よりもさらに非局在的な，ある側面または次元の中に存在する。すなわち，これらの物体がしばしば消えたり，瞬く間に相当の距離を隔てて再び現れたりするように見える現象は，それらが固定された時間／空間の物質的側面から，本質的に非局在性を帯びた側面に位相シフトする，またはその逆のシフトをする，という事実によるものである。（そのとおり，非局在性は相対的に相対的である）

私の観察によれば，これは高々エネルギー物理学および電子工学を用い，一瞬のうちにその物質的 ET 宇宙機と搭乗者たち全員を，先にアストラルまたは CIV（意識的-知性的映像成分）と述べたものにきわめて近い，調和宇宙のある側面へ完全に位相シフトさせることにより行なわれる。この位相シフトは，強力な回転電磁場，重力場，および質量慣性の間の，ある複雑な相互作用を介して行なわれる。その宇宙機が光速という通過点のこちら側にあるとき，それは何か物質的な，つくられた物体のように見えるが，質量慣性および重力を否定するような動きをすることができる。一旦，それが光／物質の通過点の向こう側に位相シフトすると，それは消えたように見える。しかし，それはいなくなったのではない。それは，我々の SETI（地球外知性体探査）BETA 電波が及ばない，その場所にいる - 我々の軍の証人がアストラル体でそれらの宇宙機に衝突した，その場所にいるのであ

る！

宇宙機は、その形態またはエネルギースペクトル（または次元）に存在しながら滞空し、あるいは光速のはるか何倍もの速度で物質宇宙の中を移動することができる。その速度は、少なくとも光速の壁のこちら側で測定される場合、非相対論的である。しかし、1000 光年の距離を瞬時に横切ることにはできない。なぜならば、この側面に存在しながら物質宇宙を移動するとき、そこには‘抵抗’（drag）の要素があるからである。言い換えれば、物質宇宙の底部（underbelly）に粘着する物体の成分があり、それに伴う宇宙抵抗係数（coefficient of cosmic drag）が、広大な恒星間距離を瞬時に輸送することを妨げるのである。ET 宇宙機はまた、側面（または次元）間の‘接合点’（junction）のように作動し、両側面の中間に位相を合わせることができる。つまりは、宇宙機は部分的に両方の側面に存在することも可能である。

宇宙機は、こうして SETI 協会の探査が及ばない領域に滞空することができる - そして、探知されないままに滞空し続けることができる。宇宙機が物質的側面に完全に姿を現し、さらに建物の中の SETI 協会員がわざわざ外を眺め、装置を見 - それを正直に報告しない限り。

同様に、ET 交信システムは、心、思考、およびコンピューター制御のテレメトリーと接続している。数十年間、人々は UFO とのテレパシクな経験として退けられてきた出来事を報告してきた。そのような報告が告白されるや否や、科学界は怒りの声を上げ、事件全体を放り出す。なんてことだ、彼らは赤ん坊を風呂桶の水ごと捨ててしまった。ヤーン博士、ドッシー博士、その他の人々が実証したように、心および思考は物質、さらには技術的システムにさえも接続し、それに影響を与えることができる。この現象に関わる 35 年間の経験から明らかなことは、恒星間距離をリアルタイムで交信するために、ET の交信プロトコルは AT&T 社のマイクロ波システムを使用していないということである。それは不可能である。ET たちは、思考および意識と直接相互作用をするほどに進歩したコンピューター制御システムを使用しており、そのようにして非局在的なエネルギースペクトルにアクセスし、線形時間および空間を迂回しているのである。

まさに数千人の人々が、彼らに対して思考／物質またはテレパシクな要素を持つ、これらの物体と相互作用をしてきた。我々がそのような報告を退けることは、危険な賭だと私は感じている。我々は、次の偉大な科学に向かう扉を荒々しく閉めているのかもしれないのだ： 意識、そして意識と物質および技術的システムの接続に関する科学。

これらのシステムを、脳波の活動およびそのコンピューターとのつながりを用いた人類による現行実験と混同してはいけない： 脳波の実験では、光速でしか進まない電磁エネルギーが依然使われている。ここで述べた ET システムは、光速という通過点の向こう側で作動するものであり、技術の力を借りながら、思考および心と直接に接続する。そのようなシステムを介して、情報は数百万光年の宇宙空間を瞬時に伝達される。それは、心、思

考、およびエネルギーの非局在的側面が利用されているからである。その交信システムには、上に述べた宇宙抵抗係数に起因する、リアルタイムの遅れがない。

本質的に、電磁気や物質よりもさらに微細（sub-electromagnetic, sub-material）なエネルギースペクトルがある - しかし、それはまさに実在するものであり、物理的（physical）なものである。この分野に関連して使われる超-物理的（meta-physical）という用語は、きわめて不正確であり、かつ時代に制約される：ホログラムもフラッシュライトも、500 年前の人類にとっては超-物理的または超自然的（supernatural）であっただろう！重要な点は、ここで述べられたエネルギーもエネルギースペクトルも、自然に発生した創造の側面だということである。それらはすべて、我々の周りにも内部にも存在する。それは‘他のもの’ではない。それは超自然的でもなく、超-物理的でもない。それはただ、現代科学によって正しく研究され、理解されてこなかったにすぎない - 恒星間宇宙を往来する進歩した ET 諸文明は、それを研究し、理解してきたのだ。

数十年前に遡り、ごく普通の人々がこれらの ET 宇宙機の一つを目撃し、思考のみによってそれと直接相互作用をした、多数の報告がある。すなわち、その目撃者が“あー、あの物体が右に曲がらないかな”と考えると、その宇宙機が右に曲がる。または、宇宙機が飛び去るとき“あの物体が向きを変え、また戻ってこないかな”と考えると、それが直ちに停止し、向きを変え、再び戻ってくる。偶然の出来事として片付けられる報告も、少しはあるかもしれない。しかし、それらの報告の多さは、これらの物体が思考と直接に接続できるテレメトリー能力を持つ、と経験的に結論せざるを得ないほどである。

私はどこかで書いたが、ET 技術のこの分野は、一般に‘意識の力を借りた技術’（consciousness assisted technologies ; CAT）、および‘技術の力を借りた意識’（technology assisted consciousness ; TAC）と考えることができる。すなわち、彼らの技術は、上に述べた結びつきを利用しているのである。そこでは、心／意識、思考が物質、機械装置、交信装置、等と技術的かつ再現可能な方法で接続する。CAT（意識の力を借りた技術）とは、個人（またはグループ）の意識および思考が、受容装置の機能を助ける、またはそれと接続する場合のことである。また TAC（技術の力を借りた意識）とは、ある装置が、個人またはグループの意識または思考を増強する、投影する、または助ける場合のことである。

例を挙げよう。CSETI（地球外知性体研究センター）は、かつてベル研究所／ルーセント・テクノロジー社で働いていた一人の科学者を見つけ出した。彼は 35 年以上も前、ある闇のプロジェクトに取り組んでいたとき、ある将軍から 1 個の ET 交信装置を渡された。この科学者は、その装置を調べて逆行分析（reverse engineer）するように頼まれた - すなわち、それを分解し、どのように働くのかを明らかにするのである。彼の話は、次のとおりだ。

それはグレープフルーツほどの大きさを持つ、丸い暗色物体で、表面は織り目加工され

ていた。彼がそれを受け取ると、その装置は直接彼の意識の中で、思考により‘話し’始めた。そのことに彼は驚愕した - 特に、その装置が心の中で彼にこう告げたときだった：彼にその物体を調べるように頼んだ人々は、内心悪意を持っており、科学者はその装置を破壊すべきだと！

この難問にどう対処するか悩んだ末に、この科学者は、実験中に‘誤って’その装置を過熱させてしまった。そして装置は破壊された（少なくとも物質的には）。しかし、それが破壊された後で、彼は最後の思考がこう言ったのを聞いた：‘ありがとう...’

これがとても奇妙に聞こえることを、私は承知している。しかし、最も奇妙なことが真実なのである。そしてこの報告は、とても奇妙ではあるが真実な報告の一つである。我々は、このような情報から光の速さで遠ざかり - 我々の電波信号に戻りたいかもしれない。しかし、未来がここにある。もし我々がそれに賢明に対処しなければ、他の誰か - その装置を初めに渡したあの将軍のような - がその未来を乗っ取り、我々が行きたくない場所に連れていくだろう。

過去8年間、CSETIはこの現象を追いかけて世界中を回り、その現れ方を観察してきた。写真に撮ったり、着陸痕を見つけたりすることに得意な人々がいる。これらの証拠となる多数の昼光写真がある。レーダーによる証拠もある。4000以上の着陸痕が、テッド・フィリップスにより記録されている。リチャード・ヘインズ博士は、これらの物体に関する数百件のパイロット報告を所蔵している。

我々の目的は、これらのETと彼らのレベルで相互作用をすることである。そして、彼らの現実とは何かを考え、そこに行くことである。それは一つの実験であり、経験である。それは、関係者の全員にとり、めくるめくような体験だった。

この8年間に、我々はこの論説で定性的に述べられた物事のあらゆる側面を伴う現象を経験し、目撃してきた。この現象を列挙すると、以下のとおりである：

● RV X 2 (CSETI トレーニング資料参照)。我々の実験である CE-5 構想 (CE-5 Initiative ; 第5種接近遭遇) には、数多くのプロトコル (手順) が含まれる。そのいくつかは明白かつ現実的であるが、中にはきわめて実験的で、大いに論議を呼ぶものもある。論議を呼ぶプロトコルの一つでは、グループによる非局在的意識へのアクセスが行なわれる。続いて、遠く離れた、あるいは近くにいながら人間の視覚の可視スペクトル外に位相シフトしている ET またはその宇宙機を、(意識によって) 遠隔視 (remote viewing; RV) する。一旦、ET/宇宙機が‘捕捉’ (locked on) され視覚化されたなら、そのプロセスを逆向きに進行させ、ET/宇宙機を、CIV (意識的-知性的映像成分) / 映像的思考成分の誘導 (visual thought component vectoring) により、CSETI 調査隊サイトに向けさせる。すなわち、ET/宇宙機には、先に論じた CIV 成分を介して、我々の座標および所在地がはっきりと示される。CSETI 調査実験はこのプロトコルにおいて、その ET 宇宙機を RV (意

識による遠隔視) し, その CAT (意識の力を借りた技術) テレメトリーシステムに接続し, その宇宙機を我々の正確な位置に誘導することが試みられる。本質的に, 我々はヤーン博士が PEAR (Princeton Engineering Anomalies Research ; プリンストン大学工学部特異現象調査) 研究室で行なっている実験を, 動的応用設定の中で行なっているのである: 明確な指向性を持つ意識-映像的思考を ET 交信装置に接続する。彼らが我々を見, 我々も彼らを見, コンタクトのための経路が確立されるように, 十分な正確さをもってそうすることを試みる。

これが一部の人々にとり, どれほどに奇妙に思えることか, 私は完全に承知している。しかしこれは, しばしば物体が頭上にひょいと現れる - またはそれ以上の - 結果をもたらしている, 一つの実験なのである。誘導し, コンタクトを確実にするために, 照明, レーザー, および電波信号を使用しているが, プロトコルの核心はまさしく CAT (ET たちからの応答に応じて, しばしば TAC - 下記参照) である。

RV X 2 の要点は, 以下の要素である:

- 意識の非局在的要素にアクセスする。
- ET またはその宇宙機を正確に遠隔視する。
- CIV 認識の中で ET の CAT 交信システムに接続する。
- グループが一致して繰り返す, 深宇宙から調査隊サイト特定細部に向かう映像的思考を見せることにより, ET 宇宙機を調査隊サイトの区域へと明確に誘導する。
- 出現前に ET から何らかの応答があれば, それを遠隔視する (相互作用的 RV)。

プロトコル全体が, これらの生命体と平和的なコンタクトおよび関係を確立するという, 明確な意思を持って行なわれる。

RV X 2 の実行中に, 複数のメンバーが同一の物体または生命体を '捕捉' し, それらの位置および/またはその出現時刻と場所に関して, 同じ情報を受け取ることがしばしば起きる。この情報は, グループが目撃した実際の出来事で確認されない限り, 確かなこととは見なされない。

結果として, 世界中でこれらの実験を行なった期間中に, 我々は先に述べた種々の技術を実証する経験をした。それらを一般的に述べると, 次のとおりである:

- 巨大な構造 (円盤, 三角形, 等々) を持つ宇宙機の突然の出現。それは数秒, さらにその何分の 1 かの間に 'ひょい' と現れ, 次に姿を消す。しかし, 複数のメンバーによ

り目撃される。

- 最大で数分間の、より長時間に及ぶ物体の出現。物体はそれから姿を消す（可視的／物質的な知覚の外側に位相シフト）。

- 様々な色彩の球形物体から成る、知性を持つ探査体。これは頭上、さらにはグループの間に出現する。知性的に制御されているだけではなく、それ自体が意識と知性を持つ（進歩した AI - 人工知能）。通常これらは、半透明からやや不透明な赤、青、緑または金色の球体であり、サイズは 6 インチから 1 ないし 2 フィートである。探査体はメンバー個人またはグループと意識的に相互作用をし、次に姿を消す。探査体は、ほぼ間違いなく TAC（技術の力を借りた意識）を実証するものであり、宇宙機に搭乗している ET の意識および思考（さらに性格も）が、技術の力を借り、制御されたやり方でグループの中へ投影される。

- すべての方位で同時に聞こえるかのような、全方向成分を持つ特異なビーブ音または高い音。これは、CSETI ビーブ音を電波で発射した後にしばしば起きる。調査隊サイトからは、常にこのビーブ音が送信される。

- 機器、自動車、等々への特異な電磁氣的作用（EM）。ET 宇宙機の接近と共に、しばしば機器が機能不全に陥る。このようなことが、1993 年にメキシコで起きた。このとき、直径 800 フィートの無音三角形がグループに接近し、すべてのカメラおよび他の電子機器が機能しなくなった。他に発生した現象には、レーダー探知機、レーザー探知機の始動、自動車電気系統の機能低下または電圧低下、メンバーの皮膚または衣服への静電気帯電がある。また、反時計回りに回転する宇宙機が接近したとき、私のコンパスが目盛盤を反時計回りに回転したことが数度あった。CIV／物質（下記参照）の接続が起きている間に、私のコンパスの磁北がほとんど真南（160 度の狂い）に変化し、ほぼ 3 ヶ月間そのままになった。コンパスは現在、完全に機能している（次の接近遭遇までは！）。

- 高速移動物体（fast-walker）との相互作用。RV X 2 の後で、最初は衛星のように見える複数の物体が、グループにより頻繁に目撃される - しかし物体は、それに向けられた思考または信号と相互作用をする。例を挙げると、高空を飛んでいる物体が思考指令を受けるや否や、それは停止したり不意に方向転換したりする。衛星は後退したり、右旋回したり、急降下したりしない。また、地上の人々と相互作用をしている間に輝きを増すこともない。この種類の出来事は、数度の CSETI 調査活動中に、多数のメンバーにより目撃されている。

- CIV（意識的-知性的映像成分）／物質の接続現象。この種類には、ET 物体が光と物質の通過点の向こう側にあり - こちらの側面または次元に‘滲み出’（bleed through）始めるときの、多くの現象が含まれる。しばしば調査隊チームは、辺り一帯に突然ストロボライトに似た光が放射される現象を目撃する。これは複数のメンバーが同時に見ること

から、眼に起因する網膜発火ではない。続いて ET 宇宙機、さらには ET 自身がかすかな姿を現し、それから形になる - ある種のきらめく電子ホログラムのようである。これらが、グループ自身の内側、またはそこから数フィート離れた場所に出現したことがある。このようなきわめて接近した遭遇が起きている間は、しばしば複数の現象が発生している：きらめく ET またはその宇宙機の視覚認知と共に物体の遠隔視が行なわれ、AI 探査体がグループの中へ飛来し、特異な音が聞こえる。往々にして、メンバーたちは誰かに触れられたと報告する。しかし、彼らが目を向けると、かすかに揺らめく光が見えるだけである。この種類の出来事が長時間続く間に、異常な時間／空間の膨張または収縮が起きる：時間は止まったように - またはとても速く進んだように感じられ、グループの周囲空間はより明確な輪郭を持つものとなる。これらの種類の遭遇が 2 時間以上続いたことがあるが、つかの間のことなのかもしれない。1998 年に英国オールトンバーンズの近くで、別々の夜にきわめて巨大な円形宇宙機が目撃された。それはひょいと現れ、数秒で消えた。そのことがあった後で、グループの近くに同じ物体が降下した。それはきらきら輝く形をしており、それと分離して ET 生命体たちのきらめく部分があった。彼らはグループのメンバーそれぞれの間に入って並んだのである！ 設置点の温度は、少なくとも華氏 10 ないし 15 度上昇した。メンバーの全員がその物体と生命体たちを見た。生命体はどれも完全に '固い' (hard) 物質ではなく、ただ部分的にこちらの次元にとどまっていた。

1997 年に英国で調査トレーニングをしていたとき、私の信頼すべき同僚であるシャリ・アダミアクと私は、我々が借りていた荘園屋敷の 2 階の一室にいた。チームの他のメンバーは 6 名ほどだったが、荘園屋敷の外にいた。突然私は、1 個の青白い光体または物体が、閉まった窓を通り抜けて部屋に飛び込んできたのを見た。それは暖炉近くの空中に浮かび、次に拡大して身長約 3 フィートのきらめく ET になった。まるで繊細な電子ホログラムが出現したかのようだった。それは意識と知覚を持っていた。それは物質的かつ可視的であるすれすれの状態にあったが、はっきりと分かった。これは、ET の意識および CIV (意識的-知性的映像成分) / アストラル体の AI (人工知能) 投影であり、それがこの部屋に投影されていたのだった。他のメンバー (彼らは最初、シャリと私がその部屋にいたことを知らなかった。そして翌朝になるまで、我々二人が経験したことを知らなかった) が外で目撃したことは、1 個の青白い物体が空から急降下し、二人がいた部屋の窓に飛び込んだということだった。彼らは全員この物体を目撃したが、その後でシャリと私がこの ET との間に持った経験に気付くことはなかった。これは、TAC (技術の力を借りた意識) のもう一つの好例である。

● 明晰夢の状態における ET またはその宇宙機との相互作用。ET 技術の現実とは、彼らが CIV 次元とこの物質的次元との間を、境目なく移動できるようにする。また、彼らの交信システムは、CIV 伝達モードの方を好むために、しばしば個人 (ときには複数) は、夢の状態と細部に及ぶ相互作用をする。このエネルギースペクトルと接続する CIV / アストラル成分および技術は、夢の状態と容易に接続できるようにすることを覚えてほしい。というのは、明晰夢の状態とは、個人の CIV / アストラル体または成分が活性化されたものだからである。ET たちは、我々が電話を取ってニューヨークを呼ぶのと同じくらい容易に、

この側面に接続することができる。私の考えだが、ET たちが最も普通に我々個人と相互作用をしてきた方法は、明晰夢の中であって、物質的なコンタクト（身体的コンタクト）ではない。物質的なコンタクトは起きてきたが、それは危険であり、一旦これらのより繊細な技術がマスターされ理解されたならば、不必要である。CIV／アストラルのスペクトルが、恒星間交信および旅行のために ET たちが移行しているに違いない好ましい領域であること - また、それが明晰夢の中で活性化または利用されているものと同じスペクトルであること - が正しく認識されたならば、これほど多くの人々がこの種の経験を報告する理由を理解することができる。上に述べた RV X 2 プロトコルは、ET 技術および ET と意図的に接続するために、拡張された認識および CIV 成分の意識を活性化するものである。

● 固体物質を通過する宇宙機。一度ならず、我々は固体に見える ET 物体または宇宙機（その金属表面から日射が照り返っている白昼の目撃）が、衝突することなく、そのまま山体に入っていくのを目撃した。これは、宇宙機の物質に振動数シフトを起こさせ、実質的に互いに影響を及ぼすことなく、従来密度の物質を網目のように通過することにより、達成される。すなわち、振動数シフトは、一つの固体物体がもう一方の物体を、相互作用を及ぼし合うことなく通過することを可能にするのである。我々が‘固体物質’と呼んでいるものの大部分は、少しも固体ではない - それはほとんど空間である（または何かである - ヒント：上に概要を述べた宇宙観を参照）ことを覚えてほしい。この現象は、数十年間報告されてきたが、一部の人々がそのような報告を、‘霊もどき’またはポルターガイストのようなものとして退ける原因となってきた。本当は、それは物質の振動数を変えて（彼らはまた、同様な方法により時間／空間の関係をも変えることができる）、より深い、または繊細なレベルの実在上で作動する、ET 技術のもう一つの現れにすぎない。さらに指摘すべきことは、私の知る闇の軍関係情報源が直接証言したことだが、少なくとも 1953 年には、人類の秘密プロジェクトが物体の物質化および非物質化を行ない、それを区切られた空間を越えて移動していたということである。我々が 1953 年にこれを秘密裏に行っていたとするならば、恒星間 ET 技術がどれほどの進歩を成し遂げられるのか、想像に難くない。

このリストをさらに続けることもできようが、読者は上に述べたことから、ET 技術の現れ方がどれほど異常なものであり得るのか、うかがい知るはずである。上記のことから、ET 事象がなぜ、CIV（意識的-知性的映像成分）／アストラルまたは因のレベルに起源を持つ現象と混同される可能性があるのか、容易に理解される。それは ET ではなく、同じ現れ方の成分を持つ現象なのである。文献資料が ET、天使、ゴースト、そしてあらゆる種類の、すべてをひと絡げにした奇現象の錯綜した報告で満ちていることは、少しも不思議ではない。確かに、数百年前の人々にとり、現代人は超自然的な何かに見えただろう：携帯電話、ホログラム、衛星テレビ、レンジ・ローバー（*4WD 車）を持って、1692 年にマサチューセッツ州セイラムの教会に現れることを想像してほしい。あなたは魔女として、即刻火あぶりにされただろう！

それでも、調和宇宙が多くの存在レベルを含むことを覚えておくことは重要である。ET

にあらざる CIV／アストラルおよび因の世界があり、その存在者たちがいる。また一方で、時々、またはほとんどの時をそれらの繊細な領域に属する物理的宇宙の側面と接続し、それを利用している ET たちがいる。（スティーブン・M・グリア 医師による 'Extraterrestrials and the New Cosmology ; 地球外生命体と新しい宇宙観' を参照）

また、次のことも覚えておくべきである。ET のすべてが、そのような進歩を遂げているわけではないだろう。数十億の銀河系がそれぞれ数十億の星々を持っていることを考えるとき、一部の ET たちは石器時代の人類のようであり、また一部は我々と同じ進化のレベルにあり、さらに別の ET たちは、今日の我々よりも数百万年進歩していると思われる。SETI（地球外知性体探査）協会の人々よ、あなたたちが、我々と同じレベルにあって、何よりも線形的な電波技術を今も利用している ET を発見しますように。見込みはあるだろう、そこには誰かがいる。

しかし、このことを知ってほしい： 電波や内燃機関を超えて進歩した ET たちが、確かに存在する。彼らは地球にいる。彼らは我々の周りにいるかもしれない。我々は、まさに我々の目の前に滞空する類い稀なる機会に、心と目を開こうではないか。物事の多くがとばりの向こう側 - 光速という通過点を超えたところ - に存在するからだ。それは人類による探求を待っている。

スティーブン・M・グリア 医師, CSETI 責任者
1998 年 11 月 5 日
バージニア州シャーロットビル

（訳： 廣瀬 保雄）